様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０１０５３

研究課題名（和文）ビザンツ帝国のソフトパワー戦略－9～12世紀を軸に－

研究課題名（英文）Soft Power Strategy of the Byzantine Empire

研究代表者
根津　由喜夫（Nezu, Yukio）

金沢大学・人文学系・教授

研究者番号：５０２０２２４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：今回の研究の課題は、ほとんどビザンツの支配が及んでいない遠隔地域の住民が、ビザンツの宗主権下にあることを主張し、皇帝の臣民としての地位を誇る態度を示した理由を究明することにあった。コロナ禍の影響で当初の調査プランは一部、変更を余儀なくされ、調査はほぼイタリア本土に集中することになったが、イタリアのトスカーナ、カンパーニア、プーリア、カラブリアなどの地域において2度の調査活動を実施することができた。現地に残る歴史的建造物や絵画・美術工芸品などの視覚的資料を実地に見聞し、文献を読み解くだけでは体得できなかったイタリアにおける「ビザンツ的なるもの」の片鱗を感じることができたことは大きな収穫であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　今回の研究の最大の学術的意義は、文献調査だけではなかなか十分に解明しきれないイタリア各地に残る「ビザンツ的なるもの」の痕跡を、現地調査を通じて積極的に探求したことである。それらは必ずしも明示的なものではなく、またどこまで当時のそれらの造形者がビザンツ性を意識していたかすら明らかでないものも少なくないが、それだけいっそう中世イタリアの人々の心の奥底に「ビザンツ的なるもの」が深く刻まれていたことを窺わせるものになっている。こうした事象は、異国の魅力的な文化が現地の人々の心を感化させた例として、時や空間を越え、様々な異文化交流の歴史を考察するにあたって、貴重な参照系を提供するものと言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：The task of my research is to make clear the reason why many peoples living far from Byzantium and were hardly ruled by them insisted they were under suzerainty of and boasted of their status as the subject of Byzantine Emperor.
Though original investigation plan was forced to a change under the influence of the corona pandemic and the investigation had to concentrate on the Italian mainland, I was able to carry out 2 research tour in the areas of Tuscany, Campania, Puglia and Calabria of Italy. It was a great achievement that by visiting to many historical structures remaining on the spot and seeing many paintings or art cafts, we were able to feel the glimpse of "things like byzantine " in Italy which will be not able to acquire only by reading books.

研究分野：西洋史

キーワード：ビザンツ　アドリア海　中世イタリア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2014 年にオーストラリアで公刊された以下の共同研究の成果に接したことが、本研究を着想する直接的な契機となった。Danijel Dzino and Ken Parry eds., *Byzantium, Its Neighbours and Its Cultures,* Brisbane, 2014. とりわけ、同論集に収録されたジョナサン・シェパードの論（J. Shepard, “Bunkers, Open Cities and Boats in Byzantine Diplomacy”, pp.11-44）は、ビザンツが現地住民の自発的な忠誠心を利用して帝国本土周辺にコストをかけずに自らの勢力圏を構築する状況を論じており、大いに感銘を受けた。ただ、そうした現象が確認できるのは事実であるにせよ、現地住民の立場からすれば、なぜ大した見返りもないのにビザンツに忠誠を守ったのかという疑問は完全には解消されていないように思われ、さらにこうした視角から探求を行う必要性を感じたのが本研究の原点である。

２．研究の目的

千年以上に及ぶ長い歴史を誇るビザンツ帝国であったが、大半の時代において、帝国はバルカン半島南部と小アジアから構成された国土の主要部分を周囲の的から防衛するのに手一杯だった印象が強い。ところが、一見、奇妙なことに思われるのだが、帝国支配権の外縁部に位置する地域（たとえばアドリア海北東岸部やサルディニア島など）の住民たちが、ビザンツの実効支配が及んでいないにもかかわらず、自発的に皇帝の臣民であると称し、帝国の宗主権下にあることを対外的に表明するような現象が目撃されている。本研究は、こうした一見不可思議な現象がなぜ成立し得たのか、現地住民と帝国中央はいかなる絆で結ばれていたのか、を解明することを目指している。ビザンツが自らの周囲に友好な勢力の圏域を構築するのに活用した、軍事力でも経済力でもないある種の「ソフトパワー」とはいかなるものであったのか。その実像を探求するのが今回の研究の課題である。

３．研究の方法

本研究の主要な目的は、ビザンツ周辺地域に現地調査を行い、現存する史跡や遺物を実地に調査すると同時に、現地の博物館等の諸施設を訪れ、考古学的遺物や当時の工芸品等を詳しく調査し、あわせて必要な史料を周することにあった。当初、実施を計画していた調査プランは以下の通りである。

2019 年度は イタリア（主にサルディニアとヴェネツィア、さらに可能であれば南イタリアのカラブリア地方）およびクロアチア（イストラ半島とダルマティア地方）に関する調査を行いたい。サルディニアについては、ビザンツと関係を維持した現地有力者の足跡を辿るため、彼らが建立した教会遺構を探訪し、ビザンツ爵位を帯びた彼らの名前が刻まれた墓碑銘、現地出土のビザンツ貨幣や鉛印章などに関するデータ収集のため、カリアリ国立考古学博物館をはじめとした島内各地の博物館や研究施設を巡って資料収集に取り組むことを計画した。また、アドリア海北東岸地域に関しても、クロアチア沿海地方における中世初頭の都市遺跡や教会、博物館等において資料収集に努める予定であるが、この地域に関しては、とりわけ「リズナの請願書」に関する知見の収集を図りたいと考えている。この文書は、804 年、イストリア半島のリズナの町で開催された集会において、フランク王の宮廷から派遣された王の使者に対し、現地有力者たちがかつてビザンツ皇帝の下で彼らが享受していた権利の回復を求めて提出されたものである。この文書を詳細に分析することを通して、なぜ現地に有力者たちがビザンツの宗主権下にあることを望んだのか、その理由の一端を明らかにすることができるのではないかと考えている。また、南イタリアのカラブリア地域に関しては、ロッサーノの聖マルコ教会やスティロのカテドラルなどが調査の対象となる予定であった。

2020 年度は、北欧３国（ノルウェー、スウェーデン、デンマーク）とビザンツ帝国の相互関係の解明に取り組む計画であった。具体的には、サガ作品のなかに言及されるビザンツ関係の情報

を精査することに加え、北欧各地の聖堂や修道院の宝物庫に現存するビザンツに由来する美術工芸品（象牙細工、宝飾品、聖具類、絹織物など）を詳しく調査し、それらの年代や地域的分布状況を解明することを計画していた。これらの美術工芸品は、一般の巡礼が土産物として購入するには高価すぎ、また北欧諸国の王侯貴族は第４回十字軍に参加していなかったから、それらがコンスタンティノープル占領時の略奪品であった可能性も乏しいため、それらが当地に伝来しているのはビザンツ帝国からの外交的贈答品であった公算が高いものと推察されている。それらの年代を画定し、それらがなぜ当該の施設に収蔵されることになったのか、その伝来の経緯を説き明かすことを試みるつもりであった。

2021 年度は、それまでの調査・研究成果をまとめる作業を進めつつ、西方地域と対比させうる知見を得るため、キプロスとアルメニアに補足的な調査活動を実施することを計画していた。キプロスについては、同島が、西欧系のリュジニャン家の支配に服した 13 世紀以降に建立されたビザンツ系教会や修道院を巡り、それらの創建者の来歴を究明することを目指した。

４．研究成果

上記の研究プランは、新型コロナ・ウィルスの蔓延と世界的パンデミックによって大幅な変更を余儀なくされることになる。コロナ禍の期間中、海外への調査旅行は事実上、不可能であったため、研究期間は 2 年間の延長を申請せざるを得なかった。また、ロシア軍のウクライナ侵攻によってロシアと近接する北欧諸国への訪問は見合わせ、また、補足的な調査を予定していたアルメニアにおける調査活動も隣国アゲルバイジャンとの紛争が再発したことで断念せざるを得なかった。その結果、実際に実施された調査活動は、イタリアに集中することになった。以下においては実施された 3 度の調査旅行の概要を報告する。

2019 年度は 当初、イタリア（主にサルディニアとヴェネツィア、さらに可能であれば南イタリアのカラブリア地方）およびクロアチア（イストラ半島とダルマティア地方）に関する調査を行う予定であったが、日程の都合で一部を変更し、主に南イタリア（カラブリア、アプリア、カンパニア）およびヴェネツィア周辺域（ラグーン島嶼部とアクイレイア、グラード）において調査旅行を実施した。

2019 年夏に実施した調査においては、最初にシチリア島パレルモにおいてノルマン王宮とそれに併設されたパラティーナ礼拝堂の内部調査、ならびに以前の訪問時には修復中で内部を検分できなかったマルトラーナ教会の調査を重点的に行った。とくにマルトラーナでは、ノルマン・シチリア王ロジェール２世とその重臣アンティオキアのゲオルギオスのモザイク像を近くから実見できたことは収穫だった。

次いで南イタリアでは、カラブリア地域に関しては、ロッサーノの聖堂と付属博物館やスティロのカテドラル（カトリカ教会）、聖堂付属博物館などを訪れることができた。また、ターラント、マテーラ、オトラント、ビトント、バーリ、カノーサ・ディ・プーリャ、トラーニなどバシリカータからプーリア地方にかけての町を駆け足で巡り、主にロマネスク時代の聖堂・修道院を見て回ることができたのは大きな成果と言えよう。ナポリ近郊のサンタンジェロ・イン・フォルミス教会（11 世紀）を訪れることができたのも収穫である。

最後は一気にヴェネツィアに出て、海洋博物館および聖マルコ聖堂外周のビザンツ由来の彫像の調査に当たったほか、ムラーノ・トルチェッロ両島の聖堂、およびラグーン北東部のアクイレイア、グラード（いずれも古代末期～中世初期の歴史遺産が重要）への調査活動を実施した。

2020 年度と 21 年度はコロナ禍の影響で、当初、予定していた海外調査活動を中止せざるを得ず、当初のプランの変更をして、主に国内での文献の収集とその読解の作業に専念することになった。ただし、そうしたなかでも 2020 年 4 月には、それ以前からの研究の成果である著書「聖デメトリオスは我らとともにあり」（山川出版社）を公刊できたことは大きな喜びであった。

この期間に具体的に取り組んだのは、8－10 世紀のアドリア海北部、ビザンツとフランク人勢力の境界域における在地系力の動向に関する研究、および 15 世紀ビザンツ帝国滅亡前夜のビザンツ知識人とイタリア・ルネサンスとの相互関係などの文献を渉猟する作業である。これらはい

ずれも、ビザンツの中央政府の意向とも関係を持ちつつ、政治的・軍事的実体と離れた部分でビザンツ帝国のもつある種の「文化的パワー」にイタリアのエリート層が惹きつけられていたことが確認できた点においては一定の成果が得られたと言えるだろう。今後はアドリア海におけるビザンツの海軍力を補完する存在としてヴェネツィアがいかに台頭していったのか、ヴェネツィアとビザンツの間でアドリア海沿岸部の諸都市がどのように独自の発展を果たしていくのかなどが分析の対象となろう。

翌 2021 年度もコロナ禍の影響もあり、当初、予定していた海外調査活動を断念せざるを得ず、そのためにプランの変更を余儀なくされたことは遺憾なことと言わざるを得ない。その結果、この年度の活動も文献の収集とその読解の作業にほぼ限定されることになった。具体的に取り組んだのは、8－10 世紀のアドリア海北部、ビザンツとフランク人勢力の境界域における在地系力の動向に関する研究、および 15 世紀ビザンツ帝国滅亡前夜のビザンツ知識人とイタリア・ルネサンスとの相互関係などの文献を今年度は渉猟した。これらはいずれも、ビザンツの中央政府の意向とも関係を持ちつつ、政治的・軍事的実体と離れた部分でビザンツ帝国のもつある種の「文化的パワー」にイタリアのエリート層が惹きつけられていたことが確認できた点においては一定の成果が得られたと言えるだろう。この他にも最近はイタリアを含む西欧世界とビザンツとの相互関に関する研究が再活性化する傾向もあり、申請者もそうした動向を積極的に追跡している。 また、アドリア海におけるビザンツの海軍力を補完する存在としてヴェネツィアがいかに台頭していったのか、ヴェネツィアとビザンツの間でアドリア海沿岸部の諸都市がどのように独自の発展を果たしていくのかなどに関して分析を行ったが、これに関してはまだ十分に考察は進んでいない。

コロナ禍がようやく一段落した 2022 年度はようやく海外での調査活動を本格的に再開することが可能になった。この年の夏季に実施した調査活動の主眼が置かれたのはイタリア中北部であり、アドリア海沿岸部のアンコーナからリミニにかけて、エミリア・ロマーニャ地方のラヴェンナとフェラーラ、モデナ、トスカーナ地方のピサ、フィレンツェ、ルッカ、アレッツオなどの都市を巡り、資料を収集した。この調査では、フェラーラ・フィレンツェ公会議前後のイタリアにおけるビザンツ帝国との様々な交渉の有り様に関して興資料を資料を収集することができた。とりわけリミニにおいて「マラテスタ神殿」とビザンツ末期の哲学者ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンの墓所、フィレンツェのメディチ・リッカルド宮殿「マギの礼拝堂」においてブノッツォ・ゴッツォーリの「マギの行進」、アレッツォのフランチェスコ教会でピエロ・デッラ・フランチェスカの「聖十字架伝説」、コルトーナのフランチェスコ修道院において 10 世紀のビザンツ皇帝ニケフォロス 2 世所蔵の聖遺物容器が実見され、写真撮影を行えたことは大きな成果であった。現在、これらの調査活動で得られたデータは整理、分析中であり、近い将来に活字化して公表することを計画している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Yukio Nezu	４．巻 1
２．論文標題 The Fall of the Last Cappadocian Hero: Revisiting the Complot of Nikephoros Diogenes	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Byzantine Cappadocia	６．最初と最後の頁 222-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 根津 由喜夫	４．発行年 2020年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 220
３．書名 聖デメトリオスは我らとともにあり	

１．著者名 根津 由喜夫	４．発行年 2020年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 220
３．書名 聖デメトリオスは我らとともにあり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関